第2章　平成21年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室において年に3回程度の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成21年度は、展示・公開活動として、企画展を2度開催した。また平成20年度より開始した、学内の他の学術分野との連携企画展として本学理学部地球圏システム科学科との共催で鉱物・岩石標本展を開催した。資料館展示室以外での展示・イベント活動としては、総合図書館1階ロビーにて資料展示を、本学の寮祭である七夕祭、吉田キャンパスと常盤キャンパスの大学祭において出張展示とワークショップを開催した。

社会教育活動に関しては、農学部附属農場との共催により第9回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう4－』を開催した。また、山口大学教育学部附属山口中学校の総合教育の一環として、中学生2名に対し職場体験学習の受け入れを行った。

当年度は、本学中期計画の最終年ということもあってか、地下の掘削を伴う開発工事計画が多発し、埋蔵文化財保護対応に追われた1年であった。その結果準備が十分に行えない状況での自転車操業的事業展開が繰り返されたが、その一方で当館展示室においては多くの観覧者を迎えることができ、総入館者数は展示活動開始以来初めて1,300人を超えることとなった(表12)。以下、平成21年度に実施した展示公開活動・社会教育の概要を報告する。

表12　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1,157	1,228	776	1,333

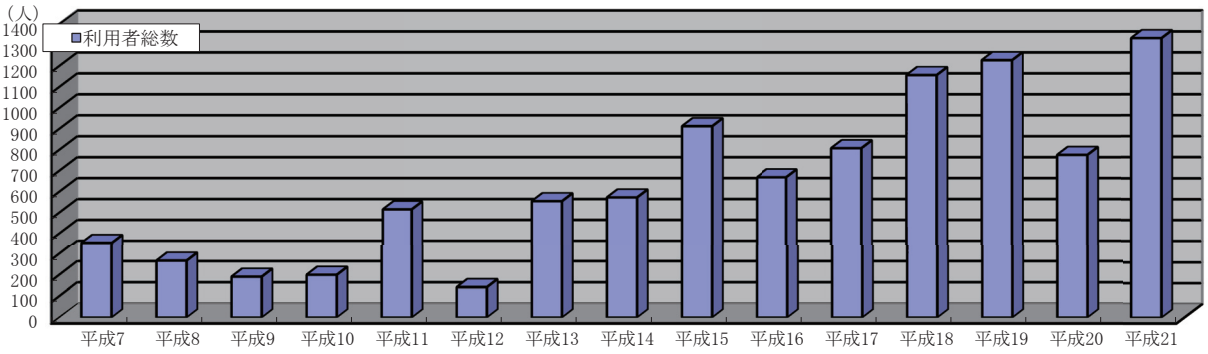
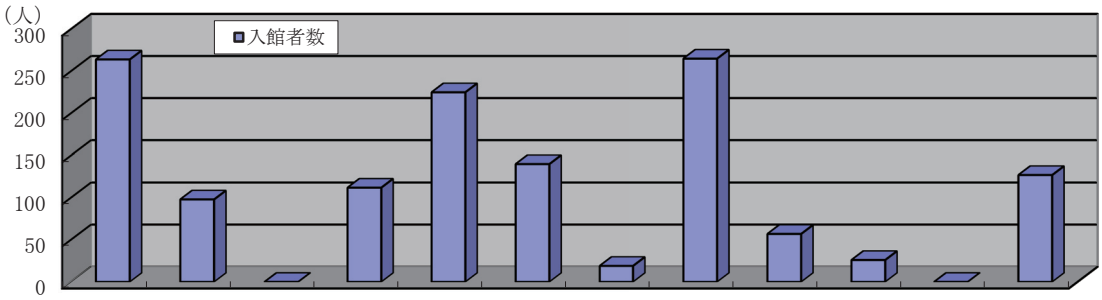


表13　平成21年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	264	98	休館	112	225	140	19	265	57	26	休館	127



第1節　資料館における展示公開活動

1．第28回企画展『土の中からコンニチワ～山口大学発掘調査速報展2009～』を開催

当館では、数年に一度埋蔵文化財調査成果の速報展を企画展示として開催している[註1]。平成20年度に実施した構内遺跡発掘調査においては古代、中世の良好な考古資料が多数出土しており[註2]、また平成21年度前期に実施した調査においても、主として弥生時代に関する遺跡情報を多く獲得するに至った[註3]ことを受け、後期に開催する企画展示（開催期間：平成21年11月９日～平成22年１月29日）にて発掘調査速報展を開催することとなった。

展示では、①中世集落が発見された吉田構内新教育研究棟新営に伴う予備・本発掘調査成果（平成20年度実施）、②中世集落とともに古代の埋没谷が確認された吉田構内動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査成果（平成20年度実施）、③弥生時代の自然河川と古墳時代末期の自然流路が検出された吉田構内経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査成果（平成21年度実施）、吉田構内野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査成果（平成21年度実施）をそれぞれブースを設けて展示した。

調査成果の定まっていない時点での速報展示では、展示解説がその後の調査研究成果と齟齬を来す場合が多い。そのため文字による解説はできるだけ回避し、資料（遺物や写真、実測図）を数多く提示すると同時に未接合の土器群を展示することにより、観覧者が「速報性」を感じられるよう工夫を行った。

会期中348人の方々に入館いただいた。アンケート調査では「生々しさが素晴らしい」「こなごなの土器、実感がありました」「木製品が水漬けになっており驚いた」など、展示意図に対する様々な声が寄せられた。今後も埋蔵文化財調査組織ならではの展示を心がけたい。

【註】

1）平成5年度開催『発掘調査速報展』、平成11年度開催『山口大学構内遺跡発掘調査概報1999－古代の吉田のすがた・縄文土器が語る小串－』、平成12年度開催『山口大学構内遺跡発掘調査概報2000－吉田遺跡・御手洗遺跡－』、平成14年度開催『山口大学発掘調査速報展2002』、平成18年度開催『吉田遺跡発掘調査速報展2006』

2）田畑直彦・横山成己（2012）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口大学埋蔵文化財資料館（編）,山口

3）本書参照

写真 164　第 28 回企画展ポスター

写真 165　展示の模様

2．第29回企画展『大学発遺跡行き～やまぐち時空列車の旅～』を開催

埋蔵文化財資料館には、当館が実施した構内遺跡での発掘調査出土品の他、本学統合移転時の山口大学吉田遺跡調査団により調査された吉田遺跡出土品、そして主として本学名誉教授小野忠熙氏が発掘調査を担当した県内主要遺跡の出土品が収蔵されている。

第29回企画展は、山口商工会議所主催「やまぐちお宝展」への参加企画となることから、当館に収蔵される県内稀少考古資料を公開することとした（開催期間：平成22年3月3日～6月4日）。

公開を行ったのは、潮待貝塚（下関市）、東之庄神田遺跡（光市）、吉田遺跡（山口市）、天王遺跡（周南市）、御屋敷山古墳（下松市）、美濃ヶ浜遺跡（山口市）、見島ジーコンボ古墳群（萩市）、多々良廃寺（防府市）、小周防相ヶ迫経塚（光市）の9遺跡出土資料である。

展示では各遺跡の概要とともに出土品の特徴などを解説したが、そのタイトル通り、展示観覧後に遺跡地へと足を運んでいただけるよう、詳細地図を掲示するなどの工夫を行った。

当企画展の総入館者数は593名を数え、3ヶ月単位での展示では過去最高の入館者数となった。また、アンケート回収率が高かったことも特徴であり、157名（26.5％）の方々に協力いただいた。アンケート内容を紹介すると、「訪れたことがある遺跡」の問い（無回答47）に対し、「吉野ヶ里遺跡」という回答が55名（50％）であり、「土井ヶ浜遺跡」が14名（12.7％）、「朝田墳墓群」が5名（4.5％）、「大内氏館跡」「綾羅木郷遺跡」「荒神谷遺跡」が3名（2.7％）と続いた。当館は吉田遺跡上に立地しており、遺跡博物館としての機能も備えるが、「吉田遺跡」と回答いただいたのは1名に過ぎなかった。これは「当館への入館歴」に対する問い（無回答2）の回答が「初めて」116名（74.8％）であることとも関連する問題であり、リピーターが増加する活動展開が必要と感じられた。一方で「1年間に博物館施設を訪れる回数」の問い（無回答3）に対し、「0回」「1回」の回答が80名（51.9％）に上っており、「博物館離れ」が進行していることも問題視すべきであろう。

最後に、「山口大学にある「これはスゴイ！と思う物」という問い（無回答15）に対し、「埋蔵文化財資料館」「遺跡の上に大学があること」「遺跡保存公園」などと回答いただいた方は44名（28.9％）であった。質問者に対する心温まる配慮に感謝するとともに、「スゴイ！」と感じる気持ちを研究に誘う大学施設となるべく、展示公開活動を継続・発展させる所存である。

写真 166　第 29 回企画展ポスター

写真 167　展示の模様

3．学内連携企画展『鉱物・岩石　七変化　-Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催

当館は設立以降一貫して埋蔵文化財・考古資料を用いた展示を実施してきたが、山口大学において「誰でも」「いつでも」「気軽に」利用できる「学内唯一の展示施設[註1]」としての機能を有していることを鑑み、平成20年度より学内連携企画展を開催することとした。平成20年度は本学教育学部美術教育教室の学生有志と連携し、美術展示『INSTALL　-インストール－　A・I・A　アート・イン・アルケオロジー』を開催した。2回目となる平成21年度は、本学理学部地球圏システム科学科との連携により、標本展示『鉱物・岩石　七変化　-Beauty and Wonder in Mineral World-』を開催することとなった（開催期間：平成21年7月6日～10月2日）。

展示資料の主体となったのは、本学理学部の加納隆教授[註2]が長年にわたり採集し研究を行ってきた鉱物・岩石標本である。会期が夏期休暇期間と重複することもあり、地域の子どもが楽しく学習できるようにとの配慮から、展示は①『石ってなあに？－鉱物と岩石はどうちがうの？－』（鉱物と岩石の概要解説）、②『地中の虹－鉱物の色と形－』（赤やピンクの鉱物：ルビー・菱マンガン鉱・バラ輝石など）（黄色やオレンジの鉱物：硫黄・黄鉄鋼・黄銅鉱など）（青や緑、紫の鉱物：コランダム・ヒスイ・スパー石など）、③『地中の虹－岩石の色と形－』（様々な色の岩石：紅簾石片岩・チャート・アベンチュリンなど）（様々な形の岩石：球状岩・眼球片麻岩・菊花石など）（オブジェのような岩石　南極の岩石：単斜輝石岩・コランダム－スピネル岩・ザクロ石片麻岩など）の3部構成とした。

展示期間中の総入館者512名を数えた。特筆すべきは8月の入館者数が過去最高となり、200名を大きく越えたことである。これは例年に無く小中学生の団体見学が多かったことよるが、近年の状況を見ると、総合博物館において全国的に学校夏期休暇期間に自然史系・科学系の特別展を開催する館が増加しているように思われる。国民のニーズに対する博物館側からの回答であろうが、図らずもその実態を目の当たりにすると、歴史系博物館施設としては一抹の寂しさもあった。

歴史系資料展示では、常に「資料の小難しさ」が問題視されてきた。考古資料は、歴史系資料の中でも比較的視認性に優れるため、その問題を軽視してきた傾向があるかに思う。大学施設としての存在意義を忘れてはならないが、キャンパス内が閑散とする夏期休暇期間中は子ども向けに「わかりやすい」「面白い」「きれい」「大きい」などをキーワードに展示を企画しても良いのではないかと感じた。

写真 168　学内連携企画展ポスター

写真 169　展示の模様

4.『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催

大学情報機構主催、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会共催により、大学情報機構3施設と人文学部、理学部が共同し、学生寮祭である姫山祭（7月4日）当日、吉田キャンパス総合図書館にて『山口大学所蔵学術資料展』を開催することとなった。各々の企画は以下の通りである。

図書館『山口大学の軌跡』

映画『学園』を放映。『学園』は、昭和32年（1957）から33年（1958）にかけ、山口大学映画製作委員会により自主作製された映画であり、当時の山口大学生の日常を描いたものである。

メディア基盤センター『異次元空間への誘い－脳がだまされる？トリックアートや3D映像－』

パネルと電光掲示板を用い、様々な錯視画像を紹介。3D映像はビデオカメラなど身近な道具を用いて自主製作。メディア基盤センターの技術力も含め、観覧者に驚かれていた。

人文学部『粟屋家文書～よみがえる徳山藩のすがた～』

『粟屋家文書』とは、毛利就隆から毛利広鎮にいたる歴代の徳山藩主が、江戸時代初期の慶長17年（1612）から後期の寛政9年（1797）までに代々家老をつとめた粟屋家に下した全75通の書状を集成したものである。現在4巻の巻子本として本学に所蔵されており、このうちの2巻を公開した。

理学部『南極の岩石～山口大学における南極地質調査～』

理学部地球科学教室の教員2名画南極観測隊に参加して収集した岩石を公開。岩石調査によってかつて存在したゴンドワナ大陸が証明されることが解説された。

埋蔵文化財資料館『つくろう！古代の装身具～勾玉身に着けクールビューティー』

大学移転前に吉田の地で採取された碧玉製勾玉（山口市歴史民俗資料館所蔵）とともに、吉田遺跡から発見された古墳時代資料を展示。先着30名に限り、滑石を素材とした勾玉づくりのワークショップを開催した。幼稚園児から本学生、老年者まで楽しく体験していた。

展示会場

埋蔵文化財資料館資料展示コーナー

勾玉づくりコーナー

勾玉完成！

メディア基盤センター展示コーナー

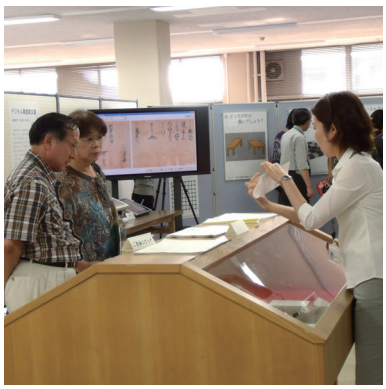

人文学部展示コーナー

写真 170　山口大学所蔵学術資料展の模様

5.『大学情報機構2009 in 常盤 Fes.』にて資料展示・ワークショップを開催

11月14日（土）、常盤祭（山口大学工学部大学祭）にて大学情報機構主催イベントを開催した。当館は平成19年度より当イベントに参加しているが、平成21年度も機構3施設がそれぞれの特色を生かし、下記の企画を行った。

図書館『企画展 山口大学の軌跡』

山口大学創立前夜から現在までの大学史のパネル展。本学の歴史を「草創期」「拡充期」「大学紛争」「発展期」「拡張期」に分割し、写真入りで各期を解説すると同時に、図書館の沿革紹介も行っていた。また、歴代学長紹介のコーナーでは、3名の学長をピックアップし、大学運営の特徴を解説していた。

メディア基盤センター『情報セキュリティ ビデオで学ぶネット社会を生き抜く力』

現在、インターネットを用いた様々な技術が開発されており、その利便性から多方面に活用されている一方で、ネットを用いた様々な犯罪も多発している状況にある。メディア基盤センターにより上映されたビデオでは、犯罪の種類やネット被害から逃れる方法が分かりやすく解説されていた。

埋蔵文化財資料館『謎のカタチ 勾玉づくりに挑戦！』

ワークショップでは、同年度七夕祭で好評であった勾玉づくりに再度取り組むこととし、同時に日本列島における「装飾品としての玉の歴史」をパネル解説した。実物展示では、勾玉づくりとは直接関係しないが、常盤キャンパスに近接する小串キャンパス（山口大学医学部構内遺跡）出土品を中心に土器資料の展示を行った。

ワークショップは先着30名までに限定した。開場と同時に次々に参加者が来場し、終了予定時刻前には30個の勾玉が完成した。参加者の多くは高校生と大学生であったが、少数ながら家族連れにも参加いただけた。軟質な滑石を用いた勾玉づくりと言えども、完成には30分～1時間を費やす。集注しながら作業に取り組む多数の姿を見て、「手作業」の素晴らしさを実感した。

埋蔵文化財資料館資料展示コーナー

大盛況の勾玉づくりコーナー

親子で熱中！

仲よく勾玉完成！

図書館展示コーナー

メディア基盤センター上映コーナー

写真 171 大学情報機構 2009 in 常盤 Fes. の模様

6.『山口大学所蔵学術資料展』にて資料展・ワークショップを開催

七夕祭に続き、吉田キャンパス大学祭である姫山祭にて大学情報機構主催、山口大学学術資産継承検討委員会共催の特別展示『山口大学所蔵学術資料展 TREASURE 2009 in Himeyama Fes.』を図書館2階閲覧室にて開催した。各施設の企画は以下の通りである。

図書館『山口大学の軌跡～創立60周年を迎えた山口大学の歩みを振り返る～』

山口大学の自主製作映画『学園』『若人の調べ』を上映するとともに、撮影風景や当時の新聞記事のパネル展示を行った。その他、昭和30年代の山口大学に関連する実物資料展示も実施した。

メディア基盤センター『物が立体に見える理由～3D映像の実現～』

立体映像をテーマとし、モノが立体に見える理由をパネル解説するとともに、メディア基盤センターの専門性を生かし、様々なハイテク機器を用いて画像・映像展示を行っていた。

埋蔵文化財資料館・人文学部考古学研究室

資料展示『弥生の王国～山口県の「百餘國」を探る～』　ワークショップ『金印をつくってみよう』

人文学部考古学研究室との共催で、弥生時代をテーマとする展示を行った。展示品は、吉田キャンパスが所在する「吉田遺跡」の弥生時代資料と、人文学部考古学研究室が過去に発掘調査を行った下関市所在「伊倉遺跡」出土資料[註1]である。ワークショップでは、金印「漢委名国王」のレプリカを観察し、方形の滑石に文字を刻む体験学習を行った。

平成17年度より開始した大学情報機構主催の大学祭・寮祭イベントは、現在のところ平成21年度をもって途絶えている。機構内に再開の動きはないが、館内ではワークショップの実施を検討している。

【註】

1）近藤喬一ほか（1984）「下関市伊倉遺跡の発掘調査」,山口大学人文学部考古学研究室（編）『西部瀬戸内における弥生文化の研究』山口大学人文学部考古学研究室研究報告第3集,山口

埋蔵文化財資料館資料展示コーナー　意外な人気の印づくり　季節がら「謹賀新年」

いつの間にか看板に作品が　図書館展示コーナー　メディア基盤センター展示コーナー

写真 172　山口大学所蔵学術資料展の模様

7．第10回～第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

当館のサテライト展示として、平成17年度より吉田キャンパス総合図書館内にて平型展示ケース1台を借用し、大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催している。平成21年度は、図書館1階第2閲覧室にて2回の特別展を開催した。

第10回大学情報機構埋蔵文化財特別展『ホンモノはどっち？』

当館では、資料館展示室にて「実物」を用いた埋蔵文化財資料展示を行っているが、諸々の事情により実物を用いることが不適当と考えられた場合には、複製品を作製し展示を行っている。今回の埋蔵文化財特別展では、実物と、その資料を基に複製したレプリカとを並べて配置し、「どちらがホンモノかを見分ける」というワークショップ的な取り組みを行った。同時に「ニセモノをつくる理由」をパネルにて解説した。展示は平成21年11月13日から平成22年2月29日までの期間で開催した。会場が図書館閲覧室であるため、見学者の反応は知るよしもないが、このような展示に触れることで楽しみながらじっくりと資料を観察する方々が増えれば望外の幸せである。

第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展『コレはナニ？』

平成21年3月8日より、第11回大学情報機構埋蔵文化財特別展『コレはナニ？』を開催した。「コレ」とは美濃ヶ浜式製塩土器脚部片であるが、何の説明をするでもなく、ただ配置するだけの展示を行ってみた（写真174）。ただし、展示ポスターに「知りたい人は埋蔵文化財資料館に急げ！」という文言を入れ、当館展示室に入館すれば回答を得ることができるよう工夫した。

この特別展は同時期に開催した埋蔵文化財資料館第28回企画展『大学発遺跡行き～やまぐち時空列車の旅～』のスピンオフ展示と位置付け、図書館から埋蔵文化財資料館へ人の流れをつくる目的で開催したものである。期間途中、展示会場が図書館2階閲覧室へと移動となった際、さらに広報力を高めるため、メディア基盤センターの杉井学准教授の協力により、展示ケース内にライブカメラを設置し、当館ホームページから24時間展示の模様が観覧できるようにした。結果としてこの展示が埋蔵文化財資料館への入館にいかほど影響を及ぼしたか定かではないが、今後とも実験的な展示を行っていきたい。

写真 173　第 10 回大学情報機構埋蔵文化財特別展

写真 174　第 11 回大学情報機構埋蔵文化財特別展